

この頁は、京都サイクリング協会
と当社との共同企画により2005
年6月12日～19日に共催の「オ
ランダ サイクリング&クルーズ*
北西部編」にご参加頂きました、佐
藤博悦様が作成されたものです。

今回のツアーの様子が大変わかり
易く紹介されている為、この度佐藤
様のお許しを得て、当社において複
製及び配布紹介させて頂く事となり
ました。

ヒシダスポーツ観光株式会社



オランダをペダルこぎ行く薄暑かな

山が見えないためか、オランダの空はとりわけ広く感じられる。干拓地（ポルダー）に広がる平野と運河・湖。その中に自転車専用道が走っている。

風薫る六月。オランダの空気の中を、念願かなってサイクリングした。向かい風の初日、天候は晴れ。



テクセル島の自転車専用道路を快走する矢島さん、中村さん、堀本さん。

はしがき

小さなことだが、私には十数年来果たせなかった「夢」があった。「あつた」と過去形になっているのは、その夢が実現したからである。

ここ二十年ほど、サイクリングを趣味としている。もともとはひざ痛のリハビリのために始めた自転車乗りだったが、風を切って走る爽快感がいつしかサイクリングをスキーと並ぶ趣味にまで押し上げてしまった。

オランダでサイクリングをしたいものだと思うようになったのは、もう十数年も前になる。たまたま手にしたオランダのPR記事の中で、「オランダは国土が平坦で、自転車専用道路が発達している」ことを知った。アップダウンのない平坦な道路を、風車やチューリップを眺めながら快走する姿をイメージすると、「いつかオランダでサイクリングを」と強く思うようになった。

この夢は在職時代には果たせなかったが、諦めかけていた今年の初め、オランダサイクリングのツアー募集があることを知り、「これがラストチャンスかも」と迷わずに申込みをした。

関西空港発のツアーの日程は、六月二日～一九日の八日間だったが、前後に移動日があるので、正味のサイクリングは五日間。このツアーの特徴は宿泊に運河に浮かぶ船を使ったこと。参加者は、ツアーコンダクターの五十歳を除くと全員六十歳を越えていた。女性二人を含めて総勢八人のグループで、遠く福島県から二人参加していた。

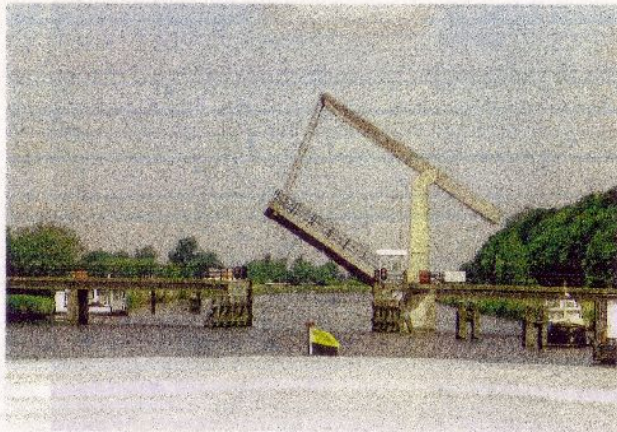
サイクリングしたのは、北ホラント州。出発地と帰着地はアムステルダム。船は二人部屋のキャビン四室を持つイルマダン（Irma dan）Ⅱ号、船長はコール（Kool）さん。この船は言ってみれば民宿船で、コール船長と奥さんの二人が切り盛りしていた。と言うわけで、朝食と夕食は船で食べた。

二日目は、初日のサイクリングで少し疲れたので運河のクルージングにした。たっぷり五時間のんびりと贅沢な船旅で過ごした。五日目にも短いクルージングがあった。五日間を通して天気に恵まれ、気温は暑からず寒からずで快適だったが、難を言えば風がきつかったこと。

俳句を始めて一年半。吟行とタイトルをつけてはみたが、主体はあくまでもサイクリング。走りながらでは、いい句想も浮かばない。その中で少しましな二十句を、今年から始めたデジカメに納めた写真と共にまとめてみた。

オランダの風物を語る代表格は、風車・チューリップ・運河だろうか。オランダ国内を流れる運河の長さは、二千キロにも達するそうだ。

となれば、運河にかかる橋の数も相当なもの。その橋の中の眺ね橋。運河クルージングでの一こま。



この眺ね橋は片開きタイプ。船の通過時には、橋上の道路は遮断される。

「地球は神が創り、オランダはオランダ人が造った」という諺がある。オランダ人は、古くから低地を干拓してポルダー（干拓地）を広げてきた。

そこは牛や羊の草喰む牧草地や農地となった。そんな中に、昔活躍した風車小屋が見える。まだ現役なのだろうか。



サイクリング道路は2車線で、ところどころ牛糞が散らばっていることも。

サイクリングには風が大敵。天気は良くても、風が強いと脚に負担がかかる。トレーニングしていない身にはとてもこたえる。ほかのメンバーはみな相当な健脚。
オランダはいつも風が強い。だから風車が発達した。この季節は、風は南風や西風が多い。白南風はしろはえと読む。

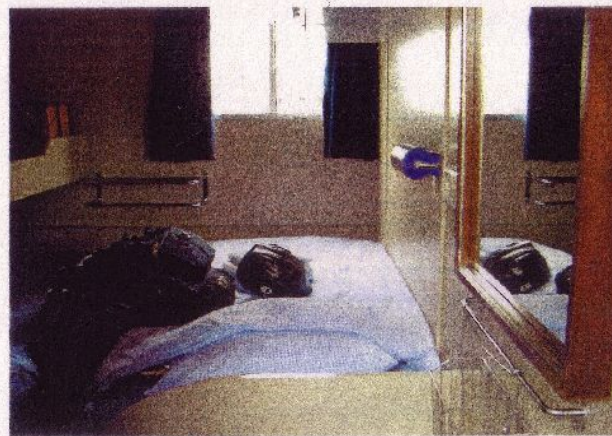
白南風に向かひて重きペダル踏む



ツアーの一行。左から堀本さん、私、矢島さん、多河さん、進藤さん、多河夫人、菱田さん、中村さん。後ろの船はイルマダンII号。

短夜のカーテンしっかり閉めにけり

オランダは緯度が高く、そのため六月の日没は午後十時ごろとなる。あたりが暗くなるのは十二時近くになってから。カーテンをしっかり閉めないことには寝付けない。
泊まった船のキャビンは手狭だったが、小さな窓があった。ここから朝日が入るのは朝五時半ごろだった。



キャビンの内部。広さは3×3mくらい、シャワー、トイレ、洗面台があった。

オランダの運河は、さながら四通八達した道路のようなものだ。幅の広い運河には細い運河が続いている。これは都会でも田舎でも同じ。ただ、水の色は茶色っぽい。
 日本ではまさに家の裏庭。そこに運河があり、その運河には自家用の小舟が浮かんでいる。その周りには鴨が。

裏庭に続く運河に通し鴨



停泊地ブルークオプランヘダイクの早朝の風景。写真の右手には広大な農地。

オランダは、北はワッデン海、西は北海に面している。海洋国であったオランダ (HOLLAND) は、「栄光の十七世紀」と言われる繁栄の時期を経験している。
 北海は、油田や天然ガスの眠る海でもあるが、この日の海は強い風に白波を立てる荒い海であった。

青嵐北海の海逆巻きて



北海に面する堤防。右手はポルダーの耕作地。風のとてもきつい日だった。

「地味な風景に、さびしさを覚える。でも、それは、この国の、静けさのせいだ。静けさこそが、この国の、真実の姿だ。静けさこそが、この国の、魂だ。」

緑なす牧場遥かに地平線

オランダは酪農の国。エダムやアルクマールのチーズ市は観光名物ともなっている。酪農を支えるのは、ポルダーに広がる牧草地と乳牛。

日本で地平線の見られるのは北海道だが、この国で地平線を見ることは、珍しいことではない。



手前は麦だろうか。遠くの黄色の小さく見える箱状のものは列車。

「静けさこそが、この国の、真実の姿だ。静けさこそが、この国の、魂だ。」

若葉風切るプロペラの銀光り

この国は、古くから風車を動力源として利用してきた。最盛期には一万台近くの風車が活躍していたそうだが、今では三枚羽根の風車が偉容を誇っている。

風力発電のルーツはデンマークだが、地球環境問題に関心の高いオランダでは、風力発電機をよく見かける。



クルージング中に見かけた林立する風力発電のプロペラ。

北の港町デンヘルダーからフェリーで二十分、テクセル島に着く。南北三四キロ、東西九キロの小豆島よりも小ぶりの島だが、今はリゾート地として名高い。ワッデン海沿いの堤防は牧草地になっていて、草喰む羊が、物珍しげにサイクリングする一行を見ていた。



テクセル島の東海岸の堤防の牧草地。右手にサイクリングロードが見える。

「ハーリング玉葱添へて食べにけり」
 ハーリングはオランダ語でニシンのこと。ニシンの解禁日は「フラッグデー」と呼ばれ、今年は六月一日だった。オランダ人は、街のハーリングスタンドで尻尾を摘んで食べる。マルゲン港の屋台で、ハーリングを数切れに切ったものを食べてみた。生臭くて、期待していた味ではなかった。



写真はスハーヘンの朝市での魚屋の店先。ニシンは一匹200円くらい。

EUの通貨がユーロになって三年が経つ。三年前にイタリア旅行に行った時は、ちょうど通貨切り替え直後で、現地の人にもとまどいを感じられた。
スハーヘンの街の朝市でユーロで買い物をした。掌に適当にコインを出して、店の人に値段分を取ってもらった。

持ち慣れぬユーロのコイン夏の市



朝市を見るのは面白い。ナッツと豆類のミックスを買って食べた。

スハーヘンの朝市は、教会の前の道路の両側に並ぶテントを張ったお店だ。靴屋、衣料品屋、花屋など専門店が軒を連ねていて、日本よりは構えがしっかりしていた。
日本では見かけないものとして、チーズ屋が二軒も出ていた。店いっぱいにはチーズが並べられ、壮観であった。

とりどりのチーズ並びて夏の市



スハーヘンの朝市で見かけたチーズ屋さん。大きなチーズがある。

開門は、運河の水位（段差）のあるところで水位を調節する設備。船がここを通るときには、水門を閉めて水位を一定（進む方向と同じ水位）にしてから、船を通して行く。
日本では珍しいが、運河の国のオランダでは数多く見られる。五十キロほどのクルージングで五、六カ所もあった。

開門の信号変はりて夏の雲



運河の開門の出入り口には船用の信号機があり、音になったら進む。

風を切る風車の音や雲の峰

最盛期には、万台近くあったオランダの風車は、今では千台以下に減ってしまった。蒸気機関が発明されて以降、技術革新の波に曝されたためだ。
ザーンセ・スカンスの風車村には六台の風車があるが、その内で、染料を作っている風車小屋を見学した。



ザーンセ・スカンスは水郷地帯で、風車村は世界遺産に登録されている。

テクセル島のアウデスキルドは、古くは漁港として栄えたところ。今では湾内に多数の大型ヨットが係留されていて、帆柱を林立させている。
 近くには小さな海洋博物館や風車小屋もあり、サイクリングしながら観光するグループもあった。

帆柱を打つ網の音南風



テクセル島のアウデスキルド港。左下にレストランや土産物店の建物がある。

チューリップ溢れんばかりの大花瓶

チューリップと言えばオランダ。この花はトルコが原産地だ。オランダには、「チューリップ狂時代」と呼ばれる球根投機で過熱した一時期（十七世紀）があった。
 六月と言えば、もうチューリップの花は終わっている時期だが、ハウスで栽培して出荷を調整しているとのことだ。



Irmadan II号での夕食。いつもはテーブルを飾っているチューリップの花瓶は奥に。

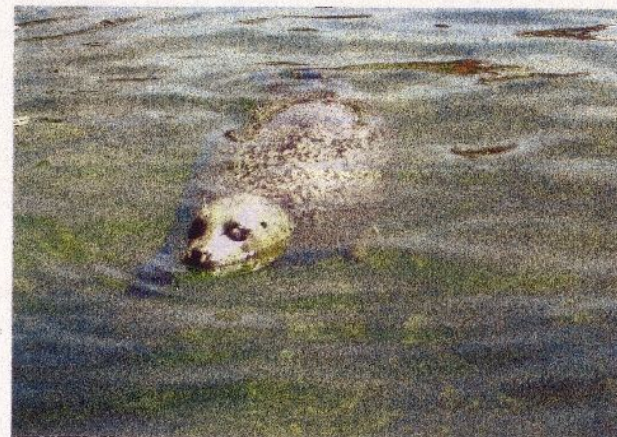
テクセル島の西海岸にエコ・マーレ (EOMARE) とどう
 自然環境教育センターがあつて、病気になったアザラシや海
 鳥を保護、リハビリを行っている。
 館内には、この島の成り立ちや北海の自然についてのコー
 ナーがあり、屋外には砂丘を巡る散策コースもある。

北海を見下ろす砂丘夏休み



エコ・マーレの建物全景。入場料は7.5ユーロと高め。鯨の模型がある。

このエコ・マーレは、母親とはぐれた赤ちゃんアザラシや
 病気のアザラシを介護して、海に戻してやったところから始
 まった。今ではアザラシの養育センターにもなっている。
 この日、屋外にあるアザラシのプールでは、眼の見えなく
 なったアザラシが泳いでいた。



目が見えないアザラシ。鳥小屋では傷ついた海鳥が羽根を休めていた。

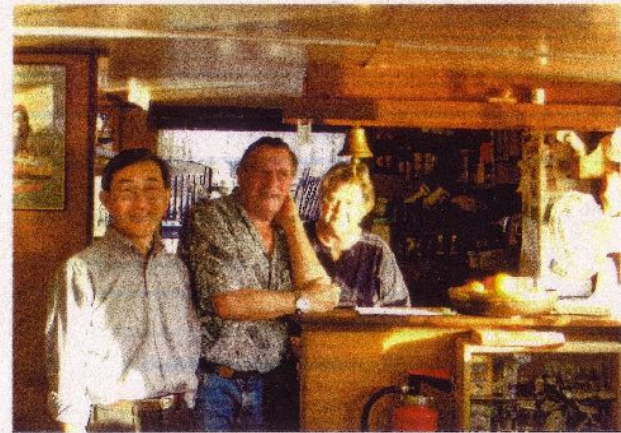
あとがき

旅行の楽しみは三回ある。まずは行く前の楽しみ。旅行先のあれこれを、書物やインターネットなどで調べて情報・知識を得て、旅先のイメージを膨らませたりすること。勿論、地図ともならめっこする。今回参考にした書籍は、司馬遼太郎の街道を行くシリーズ「オランダ紀行」。そのほか、日経B P社の「オランダ」、JTBの「オランダ大好き」など。

二回目の楽しみは旅行そのもので、中心はサイクリング。運河クルージングのおまけまでついて、サイクリングに彩りを添えてくれた。平坦地のオランダの風の中を快走する爽快感は、体験した人でないと分からない楽しみ。

三回目の楽しみは旅行を終えてから。実は、これがなかなか味わい深く奥があり、いま正にその最中にあると言えようか。撮りためた写真の整理はこれからだが、まずはこうして駄句拙文を小冊子に纏めた。これは予定外の楽しみだった。別に記録を旨とした紀行文的なものも考えている。

四泊五日のオランダサイクリング&クルージングは、仲間と一緒に楽しかったし、コール船長と奥さんのホスピタリティとも相まって旅行の印象も深まった。



船のキッチンの前で、コール船長さん夫妻と。

キャンプ村ティッシュアンテナ備えられ
オランダの自然を気負わずに楽しむことが好きな国民のようだ。運河や湖に浮かぶ小舟やヨットでの生活もそうだし、野外でキャンプすることもそうだろう。
リタイアした年輩の人々がテントを張り、しかも三カ月も滞在すると聞いて驚いた。半端な楽しみ方ではない。



スハーヘンの西、北海に近いキャンプ場。長期滞在用の大型テントが並ぶ。